

# Passengers

Haruka Yamada

※ pas·sen·ger/pæsndʒə/

(初14c；古フランス語 passagier (通行人) より、passeng- (通り過ぎる) +er (…人)、nの挿入は音便による)

一名

- 1 (乗物の) 乗客;旅客
- 2 《英略式》 (集団・チームの) 足手まとい、お荷物。
- 3 《古》 通行人 (passerby)、旅行者 (wayfarer)、  
(ジーニアス英和大辞典より)

「Passengers」は、Relight Committee 2016 の一環として行われるプロジェクトである。私は、2017年3月11日から13日の3日間、六本木のけやき坂ふもとの交差点にある、アーティスト・宮島達男の作品「Counter Void」の周りをタクシーで3周走り、その間にタクシードライバーにその作品について「これは何だか知っていますか？」という質問を投げかける。「Counter Void」は2003年に設置されたが、2011年3月11日に起こった東日本大震災をきっかけに同年3月13日に宮島達男によって消灯された。そして2016年3月11日から13日の間、Relight ProjectによってRelight Daysとして再び点灯され、2017年3月11日から13日の間にも再点灯が行われる。「Passengers」は、「Counter Void」が再点灯されるRelight Daysの3日間を使って行われる。

私が「Passengers」を行う動機はいくつかある。まずひとつ目に、社会の中でのアートについて知りたいという想いがある。私はアートを学ぶために日本をしばらく離れていたが、帰国してから日本社会の中でアーティストはどのような活動が出来るだろうかということを考えてきた。その問いに答えるために私はRelight Projectに参加し、またその質問を実際にプロジェクト「Passengers」を通じて投げかけてみたいと思った。投げかける相手にタクシードライバーを選んだのは、彼らが現代都市と現代社会の観察者であると思うからだ。彼らはタクシードライバーという職業を通じて、都市や人々を観察し、また聞き手となっている。彼らが記憶してきたものに「Counter Void」を通じて耳を傾けたと思った。また、一定の場所に留まるのではなく移動を続けることで成立するこの職業は、変化や流動そのものを体現しているように私には感じられた。私は、人やもの、社会などの様々な要素との関わりの中に自らを位置付けたいという想いを持っている。そしてまた、それら全ては不変ではなく、変わり続けるものであると考えている。だからこそタクシードライバーと関わることで自分自身を変化の中に位置付けることが出来ると考えた。乗車した分の運賃を支払うことで、私は正式にひとりの乗客として「Passengers」を行う。また、タクシーの社名表示灯は客の乗降車によって点灯・消灯を繰り返す。偶然ではあるが、このことは「Counter Void」の点灯・消灯と重なっている。私がタクシーに乗ることによって社名表示灯は消灯され、その代わりに私はタクシードライバーに自身の命を預ける。「Passengers」は自らの命を点灯・消灯へと変換することの出来る行為でもある。

「これは何だか知っていますか？」と質問する目的は、「Counter Void」やRelight Projectの説明や普及活動ではなく、アートについてタクシードライバーたちがどのように捉えているのかを聞き、会話をするところにある。もしもタクシードライバーから質問が出れば、それに返答する。全ての会話はタクシー車内の密室空間で個人的なレベルで行われ、行われる会話は映像によって記録される。同じ場所を繰り返し通ることで、私がタクシードライバーからの話を得ると同時に、彼らの記憶にも私との会話の経験が残ることを期待している。彼らに何か直接的な影響を与えることが出来たなら、それはこのプロジェクトの成果であると言えることが出来る。彼らの一人一人と出会い、話をする行為は、未来の乗客と私が間接的につながるチャンスを作ることでもある。

タクシードライバーにとって私は、「乗客」と「通り過ぎる者」という2つの意味でのpassengerとなる。そして彼らも、私が指定した「Counter Void」の前を通る時にpassengerとなり、ふたりは共に「Counter Void」の前を通り過ぎる。このプロジェクトでは私もタクシードライバーもpassengerであり、プロジェクトはふたりのpassengersの出会いの物語になるだろうと考え、このプロジェクトを「Passengers」と名付けた。